Operation Raleigh News

Operation Raleigh
DENSO

No. 6

昭和60年(1985)3月5日(火)
毎月1回発行

●発行所　オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1−7−10 築地オーミビル502号
電話　東京(03)544−7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

3月20日から第2次募集開始へ

冒険旅行の舞台は南太平洋・豪州など

1985年次オペレーション・ローリー日本代表派遣青年募集活動がいよいよ3月20日(水)から開始されます。今回の募集は1986年3月から1987年2月までのフェイズで30名が予定され、目的地は南太平洋、オセアニアとなっていますが、詳細は3月20日に発表されます。

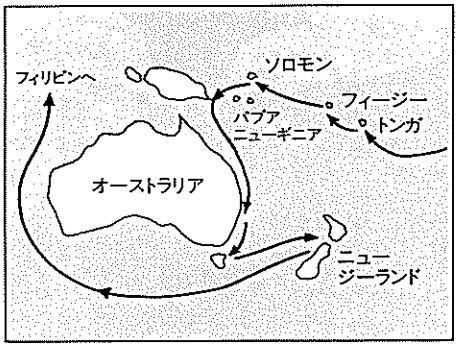
そこで、第1陣・2陣として大西洋を航海してきた青年たちの感想や意見をもとに、どんなタイプの応募者が望ましいかをまとめてみました。

1984年次の泳力審査会場(東京・高田馬場)

苦しさに耐えるガッツを

まず、帆船ゼブ号に乗込む場合、荒天時の船酔いは想像を絶するものがあります。南大西洋を23人しか乗れない小さな帆船ゼブ号で横断した第1陣の青年たちは出航まもなく、強烈な船酔いに見舞われ、地獄の苦しみを味わったということです。このような苦しさや厳しさは、旗艦であるSWR号(1,890トン)にはなかったようですが、いずれにしても体が大海原の航海に順応するまでは大変なようです。

●1986年次のOR行程(予定)



体力と関係ない船酔い

体力に勝る欧米の青年たちも同様の船酔いに苦しんだようで、結局苦しさに耐えるガッツ、精神力が重要な決め手です。相当ひどい船酔いにやられたという桃井君は、「2人の英国青年たちとだれが早く立ち直れるか競争して、3人のなかで一番先に立ち直ったのは僕だった」と誇らしげに語っていました。

英会話は必須条件

また、「言葉の壁」に苦しんだ派遣青年もいたようです。英語力にある程度の自信をもっていても、実際の会話のなかで議論を深めることはむつかしいものです。とくに世界各国からの青年たちは、ほとんどが英国圏の人たちですから英会話は必須条件です。

第2陣としてSWR号で英国から大西洋を渡り、ニューヨークを経てバハマから帰国した3青年のひとり伊藤さんは、「自分の英語力を過大評価していたと痛感しました。日本の英語教育システムはどこかが足りないのじゃないでしょうか。もっと英語をスムーズに話せたら自分の主義・主張をはっきりいえるのにと思うことが多くて、勉強不足を何度くやんだことか……」と反省していました。

求められる資質は…

このようなことから、OR日本代表派遣青年に求められる資質は《体力・精神力プラス英会話》というイメージになりそうです。

ORJC事務局でも3月20日から始まる募集活動ではガッツがあり、一定水準以上に英会話ができる、明るく積極的な青年たちの応募を期待しています。

第5陣出発前インタビュー

ホンジュラス・パナマへ8名

不安はあるが自己見つめるチャンス

オペレーション・ローリー日本代表派遣青年第5陣は、ホンジュラス組4名、パナマ組4名の合計8名です。8名とも4月上旬成田空港から出発し、現地に向かいますが、出発前にインタビューを行ないました。
●ホンジュラス組／勝間靖君、今田恒夫君、田中正信君、谷川秀夫君（以上4名）●パナマ組／平野裕加里さん、川村豊君、岸田直子さん、筒井正幸君（以上4名）。ただし筒井君は現在海外旅行中ですのでインタビューできませんでしたが、彼の報告をもとに紙上構成しました。

心配と気負い半々

――出発にあたって、怖いと思うことや不安はありませんか？

勝間　とくに恐しさは感じません。

今田　現地での内容をハッキリ聞いていないので、対象の不明確さへの不安はありますね。また初めての海外旅行なのでその点も多少不安です。

今田君

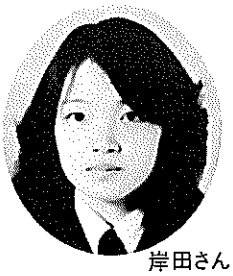
田中　あまりこれといって不安はないが、ORに参加することで何かを得なければならないという気負いがありますね。武者ぶるいみたいなものでしょうか。

谷川　まったく現地の詳報が入っていないので不安です。それに出発直前まで自分がどういうことをやるのかわからないので不安感が続くでしょうね。

平野　英語のことがとても心配です。でも、何があるかわからないのも、また楽しみですね。

川村　言葉のカベに不安を感じます。また、政情不安な地域もあるので、怖さと楽しみが同居している感じですね。

岸田　文明社会じゃない地域へ行って、東京しか知らない私はどうなるのか。また病気の心配も……。行く時期が雨季だからなおさらです。


岸田さん

筒井　代表に選ばれた瞬間から、英会話やパナマの情報不足に不安を感じました。それに卒業のことも心配ですね。

家族・友人は好意的

――家族や友人は、今回のOR参加について何といっていますか。

勝間　家族は、僕がいつもどこかへふらりと出掛けるのであきれていますね。でも本人のやろうとしていることを見守り、やはり喜んでくれています。

勝間君

今田　一応好意的ですが、ORのために一時休学となるので、帰国後の僕の過ごし方に注目しているようですね。

田中　ORとは何かがあまり理解されていないし、自分でもうまく説明しきれていないので、まわりの人々は淡々と受けとめているみたいです。

田中君

谷川　家族は自分たちの知っている国なら安心できるけれども、未知の国なので不安がっています。友だちは、若いのだから好きなことをやるべきだとうらやましがっています。

平野　体に気をつけて、といわれています。両親は食事のことや英会話ができなくて孤立しないかと心配そうです。

川村　みんなケロっとして、行ってらっしゃ～い、です。

岸田　みんながムダなこととは思っていないといってくれます。友人にはある意味でうらやましがられていますね。家族はとても協力的です。

未知の国への期待

――今回参加するにあたっての抱負を聞かせてください。

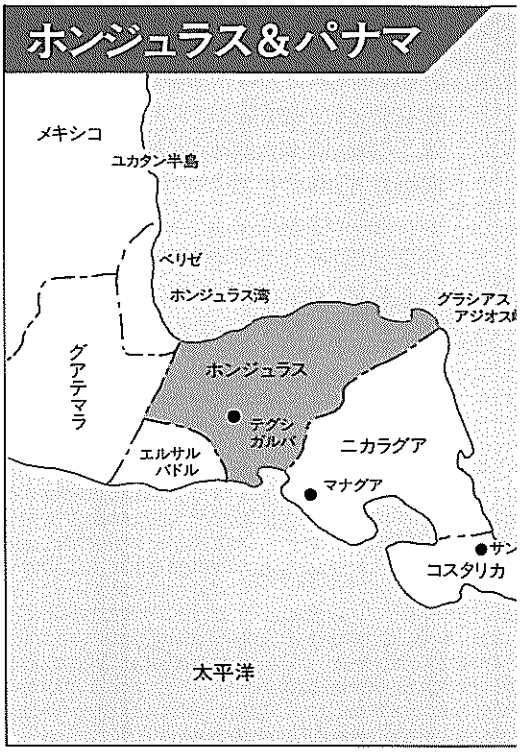
勝間　未知のことを見聞きし、経験してみたいですね。中米ホンジュラスは日本にとって未知の国であり、また逆もいえると思います。相互交流のキッカケになれたらいいですね。日本の社会でのパターン、高校→大学→就職といった殻を破って、何か輝くものを見つけてきたいものです。自分がこれまで限界だと思っていたものを越えて、何か新しい視野と可能性を見つけることができたら、最高ですね。

今田　英会話が少しでも上達できたら、と思っています。また他国の人々と仲良くできたらすばらしい。

田中　3ヵ月ぐらいで多くのことができるとは思いません。期待や気負いが大き過ぎると、逆にのびのびできない気がします。いまはスペイン語講座を続けたり、ORへの準備にそれなりに取組んでいます。

谷川　いつもは慣れ親しんだ環境の中にいるので、自分がハッキリ見えないが、異なった価値観の中で、自分を見つめてみたいと思います。ふだんは必要以上には自己表現しない僕ですが、雑多な集団の中で、どの

谷川君



interview＊ interview＊ interview＊

自分を出すのかが課題のひと
思います。
いろいろな
い、自分な
うことがあ
ょうね。自
観的に見つ
ャンスだと
います。

平野さん

外国人と接
とがないの
国の人々の
自分はどう
とを経験し
ていくのか
てみたいで
そして、い
なことにチ
ジしたいと思っています。

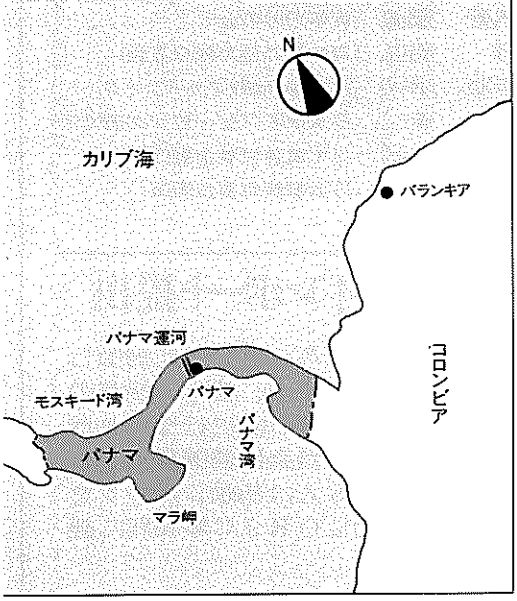
川村君

非文明国の中で、自分の実力
だけ発揮できるのか楽しみで
いろいろなことをやってみた
います。

自分がＯＲ
した動機を
、しかし気
ぎずに活動
と思ってい

筒井君

写真はバハマでの活動風景



陸ガメ・薬草などの調査

カヌーによる奥地探険も

オペレーション・ローリー英国本部では、ホンジュラスおよびパナマでのプロジェクトを次のように発表しています。

ホンジュラス組

〔科学活動〕

●**陸ガメの調査**
ケント大学のイアン・スイングランド博士のもとで行なわれる世界的な科学プロジェクトです。絶滅の危機に頻している陸ガメの現状を調査します。

●**薬草の調査**
現地の人々による民間療法として伝統的に利用されている薬草に科学のメスを入れようというものです。インディアンによるその使用法、料理法を調査し、その地域特有の薬草を採集します。

●**考古学的調査**

・**リオ・プラタノの岩石分類調査**
1930年代にスピンデン、ストーン、ストロングたちによって初めて発見された岩石の分類記録（標本）をつくる活動です。

・**リオ・パウラヤの調査**
ホンジュラスの「失なわれたホワイト・シティ」に関連すると思われる、1920年代にスピンデンによって発見された遺跡を探索します。ここは丘の急斜面にあり、コロンブスの米大陸発見以前の遺跡です。

・**植民地時代のコロニー調査**
18世紀ごろブラック・リバーにあった英国コロニーに関連する居留地と工業遺跡を探索します。ここはリオ・ティント礁湖・洪積平野と呼ばれているところです。

●**淡水魚の調査**
礁湖や川の上流に網を仕掛け、淡水魚の種類や生息数を調べます。また淡水魚の食性（エサ）や習性を調査・研究します。

●**イグアナの調査**
ジャングルに住んでいる大トカゲ、イグアナの習性や生息状況の調査・研究です。

〔奉仕活動〕

●**病院建設のアシスト**
ベースキャンプの近くにあるパラシオスという小さな町のミッション系病院の建設を手伝うプロジェクトです。

〔冒険活動〕

●**ジャングル探険・カヌー旅行**
考古学プロジェクトの一環としてトレッキング（歩き旅）をしたり、ジャングルの奥地にあるさまざまな遺跡を探索します。またリオ・プランタノの上流では、カヌーによる探険を行ないます。

パナマ組

〔科学活動〕

●**沈没船の発掘調査**
カレドニア湾内に沈んでいる18世紀のスコットランド貨物船Olive Branch号の発掘調査。

●**考古学調査**
アクラにある初期のスペイン人居留地遺跡の探査活動。

●**ウミガメの調査**
ウミガメのすみかや産卵場所の調査活動。

●**金山の考古学調査**
北ヤビザとカナの間にある金山で、徒歩旅行で行くことになっています。

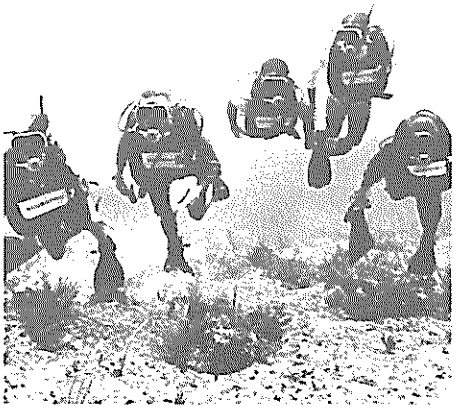
●**難破船ポートベロの科学調査**
パナマ委員会の依頼で、難破船ポートベロ号を科学的に調査。

〔奉仕活動〕

●**眼の手術のアシスト**
サン・ブラス島の貧しい人々の白内障の手術を実施している米国の眼科医チームの手伝い。

〔冒険旅行〕

●**ジャングル探険**
ジャングルパトロール活動の実施。


写真はバハマでの活動風景

日本代表派遣青年のページ

沈没船の探査など

タークス島の戸崎君からたより

グランドターク島にいる戸崎肇君から２月６日付のたよりが届きました。同じグループの小俣博泰君はカイコス島に行っているようですが、１月下旬の時点では、２人ともゼブ号でドミニカ共和国に入り、街を歩いたり、山登りをしたり、エキサイティングな体験をしたようです。小俣君はガケから落ちて足をねんざしましたが幸い軽傷だったようです。

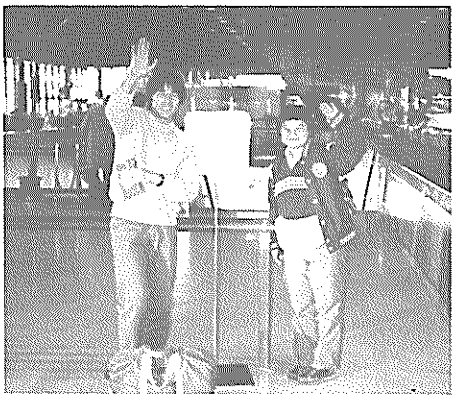
戸崎君からのたよりの一部を要約すると、次のとおりです。

「約1週間にわたってゼブ号に乗り組み、沈没船の部品さがしでいろいろなものを見つけました。夜の潜水もやりました。イギリス人で世界的に有名なダイバーであるキース・ジェリップさんと友だちになることもできました。ＳＷＲ号、ゼブ号ともに装備がそろっているので、陸上キャンプに比べたら天国です。われわれは船も陸も両方体験できたのでラッキーでしたが、陸上中心のフェイズは覚悟したほうがよいようです。セ↗コイ話ですが食器は大き目のものをもっていくべきです。大きさで量に差の出るパターンがよくあるのです（いつもと断言していい！）。またサングラスと帽子は必需品です。２月21日には再びＳＷＲ号に乗り、最後の移動を開始します。僕は日本にはまっすぐ帰る予定です。」

コスタリカ組 笑顔で成田出発

オペレーション・ローリー1984年次第４陣としてコスタリカに派遣された前橋宏美さん、山内泰胤君は２月14日(木)午後５時40分成田空港発の日本航空機で出発しました。

成田空港では高橋浩ＯＲＪＣ実行委員（日本電装営業企画室）や事務局員の見送りを受け、元気いっぱい笑顔で旅立ちました。



成田空港出発ゲート前で

Operation Raleigh
DENSO
オペレーション・ローリー＆日本電装

元気に帰国報告 5青年日本電装へ

２月12日(火)松井君、桃井君、戸上君、橋本さん、伊藤さんの帰国５青年が無事帰国したことを報告するとともに、さまざまな支援へのお礼を述べるため、日本電装本社（愛知県刈谷市）を訪問しました。日本電装からは田辺副社長、稲生常務らが出迎え、楽しい歓談が行なわれました。

同日、５青年は朝日新聞名古屋本社にも訪れ、帰国報告しました。

日本電装の応接室で帰国報告

テレビ愛知でOR紹介

第１陣の桃井君と第２陣の橋本さんは、１月30日夕方５時からのテレビ愛知ニュース番組・ニュースレポートにゲストとして出演し、ＯＲ参加青年としての苦心談や感想を語りました。画面ではＮＤマークの入りのセイルをはらんだゼブ号の勇姿や参加青年たちの活動の様子などが紹介されました。

ORJC 事務局 NEWS

実行委員を増員

オペレーション・ローリー日本委員会は1985年次のＯＲＪＣ実行委員に新しく伊藤幸司氏、沢木勇二氏を加えました。

〔伊藤幸司氏〕 1945年生まれ。武蔵野市在住のフリーライター。アジア、アフリカ、ニュージーランド、カナダなどの探険を経験。主著には「地図を歩く手帖」（山と渓谷社）など

伊藤氏の話 派遣先での服装や準備の面、フェイズを終了したメンバーの現地情報やノウハウの相互交換の場づくりなど、具体的な活動に役立つ、指導や助言を提供したい。

〔沢木勇二氏〕 1940年生まれ。川崎市在住。山岳救助の専門家で、日本ライフセービング研究所所長。赤十字救急法検定員、日本山岳協会遭難対策常任委員、救急医学会会員、環境庁自然公園指導員などを兼務。

沢木氏の話 ＯＲでは、参加者の一人一人が、何かの面で、全体に貢献できることが求められています。その一分野として、日本代表青年全員が救急法をマスターしてはと思います。

従って1985年次のＯＲＪＣ実行委員会はつぎのメンバーで構成されます。（敬称略）

寺下　英明（日本青年海外派遣団）
奥野　照義（青年の船の会）
湊　明弘（青年海外協力隊ＯＢ会）
伊藤　幸司（地平線会議・フリーライター）
沢木　勇二（日本ライフセービング研究所）
小林荘之輔（日本電装営業企画室）
高橋　浩（日本電装営業企画室）

帰国青年レポート提出

１月16日(水)そろって元気に帰国した松井、桃井、戸上、橋本、伊藤の５青年は、２月８日(金)に行なわれたＯＲＪＣ実行委員会に帰国報告をしました。また５人は活動レポートを２月下旬までにＯＲＪＣ事務局に提出しました。